

もうすぐ春です。

春と言えば「桜」を思い浮かべる方も多いと思います。

特に、あきる野市は桜が多く、里山から奥山のスギ・ヒノキ林の植林地でもポツリポツリと雪洞に灯をともしたように桜が咲いているのが目に付きます。

市内の街路樹にも桜が多く見られます。古くは五日市線の各駅に植えられた「安兵衛桜」があり、歴史的にもあきる野市は桜を親しんできました。

しかし、このところ「ベッコウタケ病」とも呼ぶべき桜の病気を目にします。これはベッコウタケというサルノコシカケの仲間のキノコで、色々な木に生えて悪さをしています。

幹と根の境目で菌が繁殖し、この部分を腐らせてしまいます。この部分が腐ると、大きな木は自身の体重を支えきれなくなり、根株から折れたり、根株ごと倒壊する事故につながります。

厄介なことに、桜の内部でベッコウタケが繁殖していても、外見上とても元気で、きれいに花が咲き、枝葉を伸ばしてこんもり茂ります。



↑  
この桜はベッコウタケには感染していません



上の写真はベッコウタケに感染した桜です。

この様に洞などの開口部が全くなく、毎年綺麗な花を咲かせていましたが、見えないところで腐りが進行していました。

この状態では根株の構造材が無くなり、樹木は残った部位で、重たい重量を支えることになります。

樹木を支える力は非常に弱く、夏の台風などの大風や、冬の大雪といった大きな力が加わると、この部分から折れてしまいます。

この桜もとても危険な状況でした。

これは、樹木特有の構造に有ります。

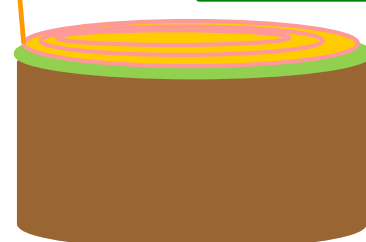
樹木の生きている細胞は形成層と言われる部位で、樹皮のすぐ下にある白い膜状の所です。ここが細胞分裂を繰り返すことで、新しい樹皮を作りながら、幹が外側に太くなっていきます。

それ以外の木部は樹木の死んだ細胞で、大きく重たい樹木の重量を支える構造材の役目をしています。ベッコウタケはこの死んだ細胞を食べて(腐朽)育ちます。生きている細胞は被害を受けないために外見は元気に見えることになります。

### 幹の断面図

構造材  
(死んだ細胞)

形成層  
(生きている細胞)





# ベッコウタケ

ベッコウタケは右の写真の様に目立たないキノコですが、樹木に対する悪さはひどいものです。

ニュースなどで大木が倒れて、被害が出ましたとの報道を時折目にします。

こういった倒壊事故による民事の裁判で、樹木の管理者(所有者)が高額な賠償責任を負った例もあるようです。

特に街路樹の場合は、大事故につながる危険が大きく、気を付けなければなりません。

ベッコウタケは特別なキノコではなく、最近には目にする機会が増えてきています。



↑ ベッコウタケ

このキノコは若い健全な樹木には感染しないと言われており、樹勢が衰退傾向にある老齢木に多く見られます。

また、街路樹などの発生状況を見ると、車が渋滞するような場所に多く見られることなどから、大気汚染との関係が疑われています。

このキノコはサクラだけでなく、ケヤキやユリノキなど多くの樹種に発生します。

上の写真の様にサルノコシカケ状で、縁が白色の明るい褐色の傘を現しているとベッコウタケとすぐに判断できます。

しかし、左の写真のような幼菌だと、サルノコシカケ状に傘が広がっていないため、まったく姿が違います。

また、古くなり、腐りかけていると下の写真のように全体が褐色になりポロポロになります。



↑ ベッコウタケ幼菌

キノコは古くなってポロポロになっても、菌糸が内部で生きています。

再び活動が活発になれば、子実体を発生させることがあるので、菌が死滅したわけではありません。

前述した通り、ベッコウタケが発生した樹木は根株が空洞になりとても危険です。

また、十分な治療も難しく、菌の活動を抑えて樹木を延命させることはできませんが、最後には安全のために伐採することが一般的な対処になります。

放置すると、大きな事故が起きる可能性があるキノコです。

見つけたら十分注意してください。

(杉野)



↑ 古くなったベッコウタケ